

令和6年1月12日

各 位

一般社団法人 全国信用組合中央協会

「日本教育新聞」 第14回懸賞作文記事掲載について

今般、第14回懸賞作文「小さな助け合いの物語賞」にかかる記事が日本教育新聞に掲載（令和5年11月27日、12月11日）されましたので、お知らせいたします。

○令和5年11月27日（月）掲載

- ・紙面ニュースBOX
「第14回「小さな助け合いの物語賞」表彰式開催」
- ・電子版記事（半永久的掲載）

URL：<https://www.kyoiku-press.com/post-265919/>

○令和5年12月11日（月）掲載

- ・紙面全5段記事広告
「『徳育奨励賞』に筑紫高校 作文で地域を見る目を養う」
- ・電子版記事（半永久的掲載）

URL：<https://www.kyoiku-press.com/post-266547/>

第14回「小さな助け合いの物語賞」表彰式開催

全国信用組合中央協会

一般社団法人全国信用組合中央協会は、10月20日に経団連会館にて、第14回「小さな助け合いの物語賞」の表彰式を開催した。

「小さな助け合いの物語賞」は、作文の応募が輝いた。佐伯「の言葉」を通じて豊かな心を育んでいただくこと（徳育の推奨）を目的とした作文コンクールで、家族や友人、同僚など「身近な関係での助け合い」に基づく「品は以下の通り。（敬称略）」

酒井章子（大阪）「誰も知らない小さな助け合いの物語」
栗林良衣（岡山）「手から手をつないでいく」
織茂麻子（宮城）「ただたどしい手話で、あなたかい助け合い」
▼徳育奨励賞（1校）
福岡県立筑紫高等学校



表彰式の様子

「小さな助け合いの物語賞」は、作文の応募が輝いた。佐伯「の言葉」を通じて豊かな心を育んでいただくこと（徳育の推奨）を目的とした作文コンクールで、家族や友人、同僚など「身近な関係での助け合い」に基づく「品は以下の通り。（敬称略）」

▼しんくみ大賞（1編）
佐伯理奈（東京・光塩女子学院高等科）「私の大好きな町」

寺岡亜希子（愛知）「毛布とミルクティー」
福田千明（岡山）「声をかけてくれてありがとう」
小橋透（大阪）「素敵な座席の譲り方」
川上祥子（岡山）「優しいおせっかい」
西有加（長崎）「父が築いていたもの」
田辺順子（東京）「親切のりレー」

▼しんくみすな賞（1編）
西尾香織（神奈川）「母のハダ」
▼未来応援賞（2編）
河野すみれ（東京・武蔵野大学付属千代田高等学校）「あいがとのりレー」

今回、しんくみ大賞には、光塩女子学院高等科・佐伯理奈さんの「私の大好きな町」が選ばれた。

▼未来応援賞（2編）
河野すみれ（東京・武蔵野大学付属千代田高等学校）「あいがとのりレー」

受賞作品は同協会のホームページより閲覧が可能。



同協会ホームページはこちら

「徳育奨励賞」に筑紫高校

作文で地域を見る目を養う

第14回感賞作文「小さな助け合いの物語」(主催：全国信用組合中央協会)の受賞者が10月20日発表された。今回より新たに団体応募の中で最も応募数が多い学校を表彰する「徳育奨励賞」には福岡県立筑紫高校が輝いた。同校は2年生の382名が応募した。文章表現力を磨くために生徒に応募を呼び掛けた筑紫高校・国語科の國友由美教諭に受賞の喜びや応募の経緯などを聞いた。

筑紫高校の卒業生で「勧めました」と國友教諭は、助け合いの具体性もある國友教諭は「議論は話す。生徒に応募を勧めるためにありがたいです。決め手になったのは、母校の受賞はうれしい。応募してくれた後輩」でもある生徒たちのほか、生徒たちが成長する機会になると応募の取り組みに賛同してくれた国語科の同僚教師に感謝したい」と受賞の喜びを語った。

「小さな助け合いの物語賞」は、地域での助け合いなどをテーマとする作文コンクール。同校が団体応募したのは今回が初めてだ。応募のきっかけは2年生は1年生の時から夏休みや冬休みの課題として詩や短歌、川柳、俳句など各種の公募文芸賞に挑戦しており、自身のさまざまな思いを伝える豊かな表現力を磨いています。さらにその表現力に磨きをかけてもらうと、小さな助け合いの物語賞が求める作文のテーマにぴったりだ。受賞のテーマ

外の世界を見る目を養い 実社会とつながる

「生徒たちはまた社会に出ているので、社会との接点は少ないかもしれないですが、今回の作文応募が、地域の人たちがいろいろな人たちに日々助けられていることを生きていることを改めて考えてもらうきっかけになればと思います。家族や先輩、友人等いつも頼りかかっている人たち以外、ちょっと離れた先にある人たちの関係性について一度振り返って作文を書いてみることを勧めたいです。」

とが、生徒たちの関心は異なる視点から周囲を見る目を養い、表現を磨く「アンテナ」する力になると考え、手に入れたと思います。」と指摘する。

生徒たちがこれまで挑戦した詩や俳句、川柳は、短い文字数で自身の思いを凝縮し、919・94の業績を影射する「安西均詩」が応募条件で、一定の結果を残している。國友教諭は「生徒が受賞すると、受賞した当人は自信を得ますし、ほかの生徒にとっては、生徒たちの感性を磨く身近な先輩や同級生らの受賞は励みとなり、創作意欲が高まります。今回の受賞は残念ながら個人での受賞は逃し、生徒たちは悔しがっていますが、受賞有無関わらず、応募した全員が周りのことを目に向けて取り組む貴重な機会になったことは間違いありません」と話す。

同校は目標の一つに「高次元の文武両道の目指すこと」で、自立心とチャレンジ精神が高く張って、家族・友人関係の先にある地域との関わりを大切にしている。國友教諭は「筑紫これまであまり意識しなかったらう関わりをもっと注深く見ることが重要になります。このため、生徒たちは、詩や俳句、川柳、生徒がチャレンジすることを創作するときには、また違った難しさに直面したとは思いますが、われわれ教師の期待に応え、作文を書くことで生徒の成長を応援して、これまでと



右から瀧尾博栄校長、主催団体の代表職員(阿部真也氏)



授業をする國友教諭

○日本教育新聞 掲載記事
2023 (令和5) 年 12月 11日 (月) 掲載 (全5段広告)
『「徳育奨励賞」に筑紫高校 作文で地域を見る目を養う』